

夢か現実かの間で悩む大学生の直哉
オネエの兄貴から学ぶこととは……？

山村教室ベストセレクション

オネエの覚悟

中川華子



夕暮れの大学構内では学生の声があちこちで響いていた。直哉の所属している軽音サークルの部室では、ギターを練習する井上の斜め前で、去年の夏まで金色だった髪を不自然に黒く染めた四年生が、どこにも就職が決まらないと嘆いている。

他人から見たら、自分には家業を継ぐという就職口があるだけマシなのだろう。しかし、誰が好んで葬儀屋なんかにか就職する？

井上の弾くギターの音を聞きながら、直哉は随分前から頭の隅にぶら下がり続けている自分の将来についてぼんやりと考えていた。

葬儀屋なんて、どこにもロック要素がない。

そもそも、あんな風にならなければ、兄貴が継ぐはずだったのだ。親だつて俺なんかよりもずっと優秀な兄貴に期待していたのに。

クソみたいな人生とはこういうことを言うのか。

「おい、直哉。これ、どうだ？」

直哉が打ちひしがれている横で、ギターを抱えた井上が凄まじい速さでコードを押さえようとした。

「全然弾けてねえじゃん」

「やっぱり？」

大学三年生の直哉の周りは、夏休み明けの後期の授業が始まった途端、リクルートスーツを着て大学に来る学生が増えた。

井上は相変わらず音楽のことしか考えていないようだが、こんな男でも何か就職活動を始めているのだろうか。

「お前も、どっかエントリーシート出してんの？」

「エントリーシート？」

井上は初めて聞く単語のように繰り返すと「バカじゃねえの」といったげな顔を直哉に向けた。

「こないだ事務所から連絡来たっていうのに、なに就職とか詰まんないこと考えてるワケ？」

井上は今年の春に送った音源が音楽事務所主催のオーディションの一次審査に通ったことですっかりデビューする気らしい。

直哉たちのバンド、フライハイは地元の本厚木でライブをすると、チケットはソールドアウトにはならないが、再び足を運んでくれるリピーターで一杯になる。

素人のライブチケットの売れ行きはメンバーの人脈の多さに比例しているが、リピーターが多いということは、音楽的にも評価されている証拠だと直哉も捉えている。

一次ではあるが、オーディションに通ったことで、もしかしたらデビューできるかもと期待を抱いているのは直哉も同じだが、益太郎があんな風になった今、音楽を続けることを親が許してくれるとは思えなかった。

「俺らにとつての現実は何プロデビュー！ だろ？」

井上は椅子に片足を上げると、大きく腕を持ち上げ、右手の人差し指を天に突き上げポーズを取った。

この男の自信は、ただ単に何も考えていないところからくる。

「よくそんなに自分を信じられるよな」

少し皮肉を込めて言った直哉の言葉を井上は気にする様子もなく「自分以外、誰も自分を信じてやれる人間はいない」とポーズを決めたまま目を細め、酔いしれたように遠くを見つめている。

「つつか、彼女欲しいい。まだまだ寒いしき、人肌恋しい季節だし。誰か紹介してくれよう」

「女くらい自分で探せ」

直哉が素っ気なく言うのと、井上は急に姿勢を正し真剣な顔付きになった。

「お前のお姉様は？ 彼氏、いないの？」

「は？」

本気か？

直哉が確かめるように井上の顔をマジマジと見つめると、茶がかった透き通った瞳がキラキラと輝いていた。

「おい、マジで聞いてんのかよ」

「当たり前じゃん。だって、エミリさん、すげえ女らしいっつうか、可愛いのに、同じ年の女にはない色気があるし……」

井上は昔の少女漫画に出てくる恋するヒロインのように斜め上を見つめ、顔を少し赤らめている。

アイツを性の対象に出来る井上の神経を疑う。

「彼氏とかいんのかな？」

「知らねえよ。自分で聞け」

「エミリさん、今日家いんの？ 遊びに行っていく？ なあ、

直哉！ ちょっと待てよ」

ベースの入ったケースを持ち、部屋を出ようとする直哉の

後を井上が追い掛けてきた。

なにやら部屋がまたシンナー臭い。

アイツ、また気色悪いことしてやがんな。

直哉が井上を連れてリビングへ行くと、男のナリを隠しエミリになりきった益太郎がテレビを見ながらソファの上でピンクベージュのペディキュアを塗っていた。

「お帰りの。あれ？ 井上君？ 久しぶりの」

「お邪魔しますっ」

井上が背筋を伸ばし嬉々として答えた。

「シチュー食べてく？ 作り過ぎちゃったの」

「エミさんの手料理っすか？ 光栄っす」

井上は兵隊のようにキビキビ答えると、ギターケースを床に置きダイニングチェアに素早く座った。

女装家でゲイの益太郎に井上が初めて会ったのは、去年の冬の対バンライブだった。

ライブには来るなど釘を刺したにもかかわらず、益太郎は店の紀香ママやおネエ達も連れてきて、一際野太い声で盛り上がった。

直哉も時給一〇〇円に惹かれ、紀香ママの店の手伝いをしていたことがある。手伝いと言ってもテーブルやフロア片付け、酒の搬入などの雑用係だが、おネエさま方には音楽関係者を紹介してもらおうなどいろいろ世話になった。

紀香ママはアフリカンアメリカンの父親と在日韓国人のハーフで、褐色のスラリと長い手足とエキゾチックな顔立ちからモデルと勘違いされる美貌を持つが、益太郎と一番仲の

良いゴンザレスは身長一五八センチと小柄だが、筋肉質の二の腕が逞しく女には見えない。

井上は益太郎がキャバクラで働いていると思っっているらしいが、それにしても怪しい集団だ。

彼らはライブの後の打ち上げにもちゃっかり参加して、気が付いた時は酔っぱらった井上が益太郎の肩にもたれ掛かり、頭を撫でられていた。

よく見ると青ヒゲも生えているし喉仏もある益太郎の体は女性としては完璧とは言えない。

エミリが益太郎という男であることをいつか井上も気付くと思ひ訂正してこなかったが、あの様子だと手遅れかもしれない、と直哉は思った。

「井上君。はい、どおぞ」

「あ、あ、ありがとうございますっ」

益太郎からシチューの入った皿を受け取る井上の嬉しそうな顔を見て、直哉は少し気の毒に思ったが、知らなくてもいいことは世の中にあると信じ黙っておこうと心に決めた。

「愛情入りだから、おいしいぞ☆」

益太郎は顔の横に人差し指を持ってきて、クルクル回しながらウインクしている。

「お前らマジキモい」

「お店では指名ナンバーワンだし、直哉にキモいって言われたって別にいいもん」

「そいつら、みんな変態だな」

「アンタって本当、失礼」

「そうだぞ。直哉は気付いてないけど、世の中の男子はエミ

りさんみたいなお姉様がいたらと夢見てるんだからな」

頬を膨らませて拗ねる益太郎をかばうように、井上がまくし立てた。

「井上君、やさしいん」

「いや、直哉は分かかってないんすよ。マジで」

何も分かかってないのはお前の方だ、と直哉は心の中で突っ込んだが、井上はシチューの具を頬張ると、「天使の味がします」と意味不明な言葉で益太郎を褒めている。

「それよりエミリさん。オーデイションの一次審査、通ったんすよ」

「それって、デビューできるってこと？」

「多分そうっす」

「きゃあ！ すごおい！」

お気楽な奴らだ。

二人が盛り上がっている横で、直哉は鼻で息をフンツと吐いた。

「でも、直哉が二次審査に前向きじゃないんすよ。エミリさん、なんとか言っちゃって下さい」

「直哉はノーミュージック・ノーライフなんだから大丈夫だよ」

全てを知っているとわんと言わんとばかりに益太郎が答える。

お前に何が分かるっていうんだよ。

「で？ いつ次の審査なの？」

直哉が腹を立てていることに気付く様子もなく、益太郎が鼻に掛った甘ったるい声で井上に聞いた。

「とりあえずライブ審査が十一月十一日なんすけど、エミリ

さん来てくれますか？ 俺の中ではエミリさんは勝利の女神なんで、是非とも来て頂きたいのですが」

井上は背筋を伸ばすと、かしこまった様子で益太郎の答えを待っていた。

「十一月十一日かあ。十一月十一日って、ポッキーの日だね」

「マジっすか？ ポッキーっすか？」

「そうそう。十一月十一日ってえ、棒が一本、二本、三本、四本……立ってるから、ポッキー」

益太郎は人差し指で空中にタテ棒を描きながら説明すると、最後にその指を井上の唇にあてた。

「止めて下さいよお」

真っ赤になって照れている井上とキャツキャと笑う益太郎。

直哉は以前益太郎が十一月十一日をポッキーの日と呼んで店の客の股間を追いかけ回していたことを思い出し苦笑いした。

ゲイで女装家の兄と、その兄に惚れている友人。

こんな人間に囲まれて、一人将来について真剣に悩んでいる自分が馬鹿らしくなる。

直哉は少しでもまともな空気が吸いたくなって、テレビのチャンネルをお笑い番組からニュース番組に変えた。

水曜日の三限目、昼食後の経済学を受けながら、眠気を覚まそうと直哉は肩を回した。

教室のホワイトボードとスライドの前で、かろうじて残った後ろ髪を未練がましく結んだ講師が独り言に近い声量で、

インフレとデフレの関係を信じられない程小難しく説明している。

東大出身のこの男からしたら、この三流大学じゃレベルが違うのかもしれないが、この講義じゃ誰も聞くワケがない。

講師は学生の方を見ずにパソコンとスライドに顔を向け、自分の発言の後にフフフと不吉に笑い、ノートになにかをメモしている。

居酒屋で酔っ払いのサラリーマンの話聞いていた方がよっぽど面白い。

こんな話に金を払って聞いている大学生の方が、フリーターのバンドマンよりも親が望む生活なのだから不思議だ。

男の学歴とかるうじて残った後ろ髪をむしり取りたい衝動に駆られながら、直哉がポケットから携帯を取り出すと、母からメールが来ていた。

メールの内容はいつものように益太郎の安否確認と、父の会社のことから始まっている。

父が一代で築き上げた葬儀屋は、生前葬やペット葬などにいち早く目を付け全国にチェーン展開し続けている。最近では海外に住む邦人向け日本式葬儀サービスにも手を伸ばそうとしているため、父の海外出張が増えたらしい。

メールには母が近々ゲイの人権を守るNPOを設立するため日々奮闘している様子と、来月の十一日にある役員会議に出席すると父から伝言を受けたことを伝える内容で終わっていた。

何の罪悪感からか知らないが、ゲイの人権を守るNPOなんか作って何をするつもりだ。

なにをしてもよいが、巻きこむのだけは勘弁してくれ。

直哉はゲイのシンボル、レインボーフラッグを持ち、奇抜な衣装で歌舞伎町あたりをパレードする母と益太郎を想像してゾツとした。

しかも、役員会議のある来月の十一日と言ったらバンドの二次オーディションと同じ日じゃないか。

顔を合わせれば将来のことを聞いてくる父には、はっきり言って今会いたくない。

直哉も色々考えているのだ。考えているからこそ悩んでいる。

自分の将来は自分で作れ。人がどう言おうと、自分の価値観を大事にしると父は言ってきたくせに、益太郎がゲイだと告白すると勘当し、最近では次男の直哉に会社を継がせようとしている。

会社の後継者にするなら、益太郎は高校でラグビー部の主将を務め花園まで行き、国立大学に進学して一流商社の内定を貰っていた。

両親にしてみれば、益太郎は自慢の息子だったし、本心から自分に会社を継いで欲しいわけではないと直哉は推測している。

誰の代わりでもない、自分にしかできないことがしたい。けれど、自分にしかできないことが音楽だと誰も確証を与えてはくれないし、自分にも分からないのだ。

直哉は携帯から頭を上げると、講師のハゲた前頭部を見つめ深い溜息をついた。

三限の経済学を終え、次の五限まで時間を潰しに学食に行くと、英文学科の沙世が見慣れないリクルートスーツに身を包み、遅い昼食なのか不味そうに。パスタをフォークに巻き付けていた。

沙世は益太郎の店の客だ。

益太郎とはプライベートでも仲がいいらしく、家に帰ると二人で楽しそうに料理を作ったり、海外ドラマのDVDを見たりしている。

沙世とはたまたま同じ大学の同級生ということでは会えば挨拶くらいするが、普通に考えるとオカマバーに一人で通う女子大生のギャルなんて相当変わっていると思う。

そもそも、そんな場所に通う金もないし、あつたとしてもオカマバーには使わない。

いつもはギャル特有の濃いメイクに大きめのカットソー、ピタピタのショートパンツに高いヒールの靴を履き威圧的な雰囲気なのだが、今日はリクルートスーツのせいか、しおらしく見える。

アイツでも就職活動してんのか。

少し先を越されたように焦る。

直哉は缶コーヒーを自動販売機で買うと、沙世を避けるように少し離れた柱の陰の席に腰を下ろして耳にイヤホンを取りつけると、携帯電話で曲を聴いた。

学食では、似たような恰好の女子学生三人が今流行りのアイドルグループのダンスの振り付けを練習したり、体育会らしい筋肉質な男子学生の軍団が大盛りの定食を食べていた。

こうして見渡すだけでも、似た者同士の群れが幾つも点在

し、決められた法則でもあるみたいに行動している。

一般的に売れるということは、この派閥や法則だけじゃなく、世代や国籍も関係のない音楽を作る必要があるってことだ。音楽や芸術で評価を得るのは難しいかもしれないが、だからこそ余計に評価が大切な気がした。

デビューするために作らなくてはいけないのは、まずは売れる音楽。売れなくっちゃ、誰も聞いてくれない。

売れるためには、分かりやすいメロディーと、共感しやすい詞だ。

そう考えて曲を作ると、どんどん音が媚びていくみたいだった。

目指しているのは魂揺さぶるロックなのに、レコーディングしたばかりの曲は昼間のスーパーで流れているような騒がしいだけの音楽に聞こえる。

こんなんじや駄目だ。

直哉がイヤホンを隔て音と格闘していると、着けていたイヤホンが耳から離れ、急に周りの雑音が入ってきた。

「ヘロー」

驚いて振り返ると、沙世が直哉の付けていたイヤホンをクルクル振り回して立っていた。

「おうっ」

急に現実に戻されたことや、沙世から隠れるように座っていた事実を悟られまいとして、うるたえる。

「お前か。全然気が付かなかった」

「マジ不景気なんだけど」

沙世は直哉の動揺を全く気にする様子もなく、目の前の席

に座ると就職活動用の黒いカバンから、あぶらとり紙を出しカシャカシャ言わせて鼻の脂を恥ずかしげもなく取っていく。

「なに？」

「いや」

直哉は皮脂を吸い取り半透明になっていくあぶらとり紙を見つめ言葉を呑み込んだ。

沙世はいつも目の周りを不自然に囲った濃いメイクをしているが、今日はスッピンかと思うほど化粧が薄い。

人前で堂々と皮脂を取る沙世の姿には幻滅するが、益太郎の肌を見慣れている直哉は、沙世の肌に妙に感心してしまった。

「リクルートスーツ着ると雰囲気変わるな。それとも化粧のせい？」

「面接落ちまくるのは化粧のせいだってエミリさんに指摘されて。極力薄化粧にしてんの」

もはやマスクのような化粧を日々被っている益太郎に指摘されるなんて笑える。

「お前、就職とか興味ないのかと思ってた」

「生きていくためには、やっぱ金っしょ」

沙世は人差し指と親指で円を作り“ゼニ”と表現すると、やる気のない声で言った。

「順調？」

「順調って？」

「いや、だから就職だよ」

「三十社面接受けて一つも受かってない」

三十社も受けてるのに？ 嘘だろ？

「なんか文句あんの？」

沙世は直哉の沈黙から何か感じ取ったのか、あぶらとり紙についた自分の皮脂を確認するように凝視してから、リクルートスーツのジャケットのボタンを外し、詰まらなそうに足を組んだ。

「どんな会社受けてたらそういう事になるワケ？ お前、四季報とか読んで、ちゃんと会社分析してんの」

直哉も会社分析などしていない。している以前に会社説明会にも足を運んでいないが、何か口を挟みたい衝動に駆られて友達から聞きかじった「四季報」、「会社分析」という単語を使った。

「自分が何したいとか、何ができるとか全然分かんないのに、いくら会社分析したところで分かんなくない？ ヤツてみなきや相性なんて分かんない。セックスと同じ」

沙世の口から「セックス」という言葉が開けっ広げに飛び出し、少しガツカリする。

「こうなったら、エミリさんのお店で働けないか頼んでみようかな」

「そこまで落ちぶれるなよ」

「落ちぶれるどころか、超ロック。憧れる」

あれが超ロック？

へえと応えるので精一杯だった。

「直哉も前にエミリさんのお店で働いてたんでしょ？」

「変な誤解するなよ。裏方の仕事をしてただけだからな」

「まあ、それはどうでもいいんだけど」

「どうでもよくないだろ」

「直哉、バンドの一次オーディション受かったんだってね。店に報告に来てくれないって紀香ママが嘆いてたよ」

直哉は紀香ママや店のみんなの顔を思い出し、申し訳ない気持ちになった。

応援してくれていると分かっているからこそ報告できずにいるのだ。

「お前だったらさ、夢と現実、どっち取る？」

「現実」

即答された。

「いや、そうじゃなくって。オーディションの日と実家の仕事が重なってさ。お前ならどっち取るかって意味なんだけど」

「実家って、葬儀屋の？」

沙世は携帯電話をカバンから取り出しながら聞いた。

「なんで家が葬儀屋って知ってたんだよ」

「美人薄命とか言って、お店で紀香ママがエンディングノートつけてる話になってさあ。ウエディングドレス着て死にたいんだって。理想の葬式プランについてメツチャ真剣にエミリさんに相談してんの。そんで知った」

そんな相談に乗っているのなら、兄貴が実家を継げばいいのだと思いが、直哉は缶コーヒーに口を付けた。

「オーディションと重なった仕事って何？ 誰か死ぬ予定でも入ったとか？」

予定がきたら葬儀屋も少しは楽になるが、死ぬ予定って何だろうか。

「ちげえよ。役員会議」

「直哉って役員なの？ そしたら無職の夢追い人よりよくない？」

「む、無職の夢追い人？」

沙世が自分のことを無職の夢追い人と思っていたと知り、直哉は狼狽した。

「だって、オーデイションに受かる可能性は百パーじゃないけど、腐っても役員は役員じゃん。それに、フリーターはこのご時世ヤバいでしょ」

沙世は直哉が傷付いていることなど気にする様子もなく話を続ける。

「もし直哉が会社継いで社長になったらさ、私もなんか仕事頂戴よ。死体に化粧するのとか楽しそうだよ。死んだ人の肌ってブヨブヨ？ オールした後の肌みたいに化粧ノリ悪そうだけど。あつ。私早速思いついちゃった。クラブで葬儀ってどう？ みんなで踊って故人を偲ぶ、みたいな。あとさ、葬式にある木の箱あるじゃん。あんなに死体入れて運ぶヤツあれって何て言うんだっけ？」

「納棺」

「そう、それ！ それをジェットコースターに乗せてやるの。ヤバくない？」

コイツもアホだ。三十社受けて一社も受からないのは納得できる。

直哉は沙世の話に適当に相槌を打ちながら、こんなヤツでも就職活動しているのだから、自分も一社くらい経験として受けてみるべきではないかと思っただけ。

下着姿のまま、ベッドの上に置かれているリクルートスーツと白のTシャツとジーンズを見下ろす。

白のTシャツは一見普通のシャツだが、中目黒のセレクトショップで購入した。コンプレックスの細い首が目立たない襟の空き具合が気に入っている。

スーツは先月試しに受けた電機メーカーの就職試験のために大型量販店で急いで購入したものだ。ネクタイは店員に言われた通り情熱を表す赤にしたが、自分の気持ちに反しているせいか悪目立ちして見える。

一体自分はどうしたいのだろう。

Tシャツに腕を通しながら、先週受けた就職試験を思い出す。

何の特徴もないことが特徴のスーツを着て受けた就職試験は、ただただ惨めだった。

人柄を重視するという理由でグループ面接をしたのだが、一緒のグループになった学生のボランティア活動や起業した話など、自己アピールする学生に圧倒され、発言することさえできなかった。

別にそこまでして受かりたいわけじゃねえし。

この言葉を呟くことで現実逃避を図ったが、不採用通知を初めて受け取った時、自分自身を全否定されたような精神的ショックは思った以上に大きかった。

こんなことを三十回以上経験している同級生の沙世たちを尊敬する。

音楽以外で何がやりたいか、何がやれるかも分からず、働きたい会社も思いつかないのなら、葬儀屋を継ぐのも悪くない

いのかもしれない。

Tシャツの上からワイシャツをはおり、ネクタイを締める
と鏡の前で胸を張ってみた。

スーツを着ると、世間や周りが求める自分を演じなければ
と思えてくるから不思議だ。

「ただいまあ」

ジャケットのボタンを締めていると、仕事を終えた益太郎
が千鳥足で帰ってきた。

「あらら？ 直哉君。スーツなんか着て、どうしたのよ？」

益太郎が玄関で赤いエナメルの先端が極端に尖ったハイ
ヒール靴を脱ぎながら、直哉の格好を眺めまわした。

「なるほど！ 今日のオーデイションで審査員の意表を
突こうってコンタンですなあ？」

まだ酒が抜けていない益太郎のテンションに、直哉は気分
が悪くなってきた。

「でもさあ、そのネクタイはやめたらあ？」

益太郎はそう言いながら部屋に上がると、直哉の赤いネク
タイを指差した。

酒くせえ。

「胡散臭いサラリーマンみたい」

分かっていることを人に言われると、腹が立つ。

直哉はソファの上うつ伏せで倒れている益太郎を横目
で睨むと、ヘアーワックスを手を取った。

「っっていうか、もしかして直哉」

直哉が無視するように髪にワックスを揉みこんでいると、
益太郎がソファから顔だけ持ち上げた。

「会議に出るつもりじゃないでしょうね？」

「だったら何だよ」

「アンタはアンタの人生があるんだから、お父さんの言うこと全部聞く必要はないの。それよりオーデイション！ オーデイションはどおなったのよう？ オーデイションン。おえええ。気持ちわるう」

だから、コイツは俺の何を分かってんだよ。

まだどちらに出席するか決めていないが、益太郎に罪悪感を植え付ける何かを言ってやりたくなる。

「俺だって兄貴みたいに好きなように生きてみたいよ」

「生きて生きて。楽しいよお」

益太郎はカバンからペットボトルを取り出し、ゴキユゴキユ飲みながら答えた。

何も分かってねえし。

「じゃあ誰が実家継ぐんだよ」

「どうにかなるでしょ。そんなこと」

どうにかなる？

直哉は皺を塗りつぶすように埋められたファンデーションが肌の上で崩れ、その下から青いヒゲが浮いている益太郎の顔を見つめた。

もう我慢できない。

「ヒヤダっ。こっわい顔」

「兄貴のせいだ」

「はあ？」

「兄貴さえちゃんとしてたら、俺だって葬儀屋なんか継ぐ必要はないのに」

今まで我慢してきた益太郎を恨む気持ちが言葉より先に溢れる。

「わたしのせいって言いたいの？」

「だってそうだろ？ 兄貴がもし普通だったら、親父だって何も兄貴のこと勘当しなくてよかったんだ。そしたら俺だって好きな音楽で生きていけたじゃんかよ」

兄貴のせいで、好きなことができない。

ゲイだか女装家だかトランスジェンダーだか知らないが、兄貴が普通とは違うことで、俺は親から普通を押し付けられた。

人のことなんて全く考えずに生きている兄貴が許せない
と、直哉は強い憤りを覚えた。

やっつらんねえよ。

直哉はここぞという時に穿くヴィンテージジーンズの入った黒のボストンバッグを掴むと、玄関を出て行こうと靴を履いた。

「直哉」

ドアノブに手を掛け外に出ようとする、後ろからドスの効いた男の声が響き渡る。

思わず振り返ると、益太郎がソファの上で上半身を起こし、こちらを見つめていた。

「わたしのことで直哉には迷惑を掛けてるかもしれない。けど、それとアンタが夢を諦めるって話は関係ないんじゃないか？」

「関係あるよ」

「人のせいにして」

「だって、実際兄貴のせいだろ？ 兄貴のことで、どれだけ親父たちが傷付いてきたか知ってんの？ そんな両親見て、俺も好きな音楽やって生きていくなんで言えると思うのよ」

反応を見せない益太郎の様子を見て、直哉はさらにたたみかけた。

「結局兄貴は面倒臭いことを人になすりつけて現実から逃げてただけだろ。何が同性愛者だよ。女装してるただの変態のオッサンじゃん」

言ってやった。

ずっと言いたかったことを言ってやった。

腫れものに触るみたいで家族の中でずっとタブーだった話を本人にぶつけてやったのだ。

いかにも自分が社会に理解されない被害者だと思ってるだろうが、益太郎も現実を思い知ればよい。

「覚悟は？」

直哉が言いたいことをぶつけ清々していると、益太郎がさつきより鋭い声で聞いた。

「は？ 覚悟？ 何言ってるんだよ」

直哉がヘラヘラ笑っていると、圧力を感じる視線で益太郎が睨みつけた。

「アンタに覚悟はあんのかって聞いてんだよ」

益太郎の凄みのある声に圧倒される。

直哉は息を呑んだ。

「私はね、こうやって生きていくことに覚悟ができてんだよ」
言っている意味がよく分からない。

「同級生が結婚して子供や孫ができて、わたしは髭剃った顔にファンデーション塗り込んで一生バケモン扱いされても生きてくって、アンタが言ったみたいに、変態のオッサンで生きてく覚悟ができてンだよ」

あまりの迫力にその場から動けずにいると、益太郎は自分の気持ちを落ちつけるように鼻で大きく息を吸った。

「直哉は他人から後ろ指さされようが、笑われようが、一生音楽で食っていく覚悟はあんの？」

覚悟？

直哉が考えていた音楽で生きる未来とは、沢山のオーディエンスの声援や金や名声を手に入れる未来で、他人から後ろ指をさされ、笑われて過ごす一生ではない。

しかし、“もし失敗したら”、“もし売れなかったら”と考えて、ふいに直哉は心細さを感じた。

「何も言えないんじゃない、ただ単に甘えてるだけって思うけどね」

直哉が言い返せず下を向いていると、益太郎が去って行く気配の後、洗面所で水を勢いよく出す音が部屋に響いた。

部屋を飛び出し電車に乗ると、スーツに身を包んだ人間で溢れていた。

直哉は目の前に座る猫背のサラリーマンらしき男をぼんやりと眺めた。

男は目をうつろにし、疲れきった顔でぼうつと一点を見つめている。

周りがそうだったからという理由で大学まで進んだが、も

しここで音楽を取ったら自分はどうなってしまうのだろうか。
覚悟はあるか、ないか。

音楽で食っていくのが簡単なことだとは思っていない。思
ってはいるが、その覚悟があるかと聞かれたら、何も答え
られなかった。

隣にいる二十代後半くらいの男は携帯電話のゲームに夢
中で、電車が揺れる度に体重をこちらに預けてくる。

コイツは何の覚悟があつて生きてるんだよ。

いくら睨んでも、男は携帯電話の画面を指で叩き、気付く
様子もない。

どうしてこんなヤツらが社会人になれるんだ。

井上や沙世だって、将来について何も決まってるじゃないやな
いか。

俺のせいじゃない。全て葬式屋の息子に生まれ、オカマの
兄貴を持ったせいだと直哉は両手を固く握りしめた。

闇の中に引きずりこまれるように、自分の将来が絶望的に
思える。

苦しい。

「降ります」

直哉は人ごみを掻きわけ、一度も降りたことのない各駅停
車しか停まらない駅で電車を降りた。

改札を出てしばらく歩くと、通勤時間にもかかわらず、人
通りの少ない商店街に出た。

ビニール袋をぶら提げた老人と、自転車のカゴに子供を乗
せた母親が直哉の横を通過する。

何故自分だけ辛いのだろう。

クリーニング屋の看板にある大きな白い掛け時計は、八時半を少し過ぎたところだった。

オーデイションまであと二時間、会議はあと一時間で始まる。

(了)

◆◆著者プロフィール◆◆

中川華子(なかがわ はなこ)

神奈川県出身。

山村教室に入ったのは二〇一一年、好きな作家は田辺聖子先生。

人様に作品を読んでもらうことは裸になるより恥ずかしいと思いますが、裸にバスローブ姿で準備しているにもかかわらず、スルーされることも多々あります。

そんな時、私は思うのです。

あえて、あえて恥をかくなら誰かの目に留まりたい。

山村教室に通っている皆さん同様、私も誰かに読まれる作品を書くべく腹筋バッキバキな作品を目指し精進しております。

◆◆奥付◆◆

タイトル 「オネエの覚悟」

著者 中川華子

編集・発行 山村教室 (ymmr-kinen project)

ウェブ管理 ウーニクス

本作品の一部、または全部を、無断で複製・転載・配信等を行うことを禁止します。

本作品を無断で改変等を行うことも禁止します。

権利の侵害となりますので、発行元に許諾をお求めください。